大学・大学院での研究活動と文献検索の現場

諏訪敏幸
大阪大学，国立成育医療研究センター

書誌データベースや文献検索システムのマニュアルにはそれらの仕様が書かれており，それらがどんなデータを持ちどのように検索できるかはわかる。他方それらが実際にどう使われたかは，システマティック・レビュー論文の「Search Strategy」などでその一端を知ることができる。しかし検索の現場で起こることの多くは,そこには書かれていない。文献検索には多様な現場があり，実際にそこで行われること，考えなければならないことは，現場の性格によって少しずつ異なる。臨床と学術研究では検索に求めるものが違い，同じ「研究」でも医薬品開発などの研究はまた異なるだろう。細かく言えば，学術研究のための検索でも先行研究調査，システマティック・レビューのための文献収集，スコーピング・レビューのための検索はそれぞれ要求が異なり，さらに先行研究の検索でも，研究テーマの検討段階と研究計画書を詰める段階，そして考察の段階では少し違う。

研究のための文献探しの柱となるのは書誌データベースの系統的検索である。しかし検索に「正解」はない。たしかに「より良い検索」と不適切ないし不十分な検索との違いはある。だが文献検索は研究において，問題探索・データ収集・分析・考察など多様な活動の一環であり，それ単独で善し悪しが言えるようなものではない。むしろ研究目的に沿いつつより広い視野を得ることや，研究活動全体の中で活用できる適切な答を出すことこそ，検索の現場では重要となる。そのためには検索担当者も研究を理解しなければならないし，また研究者も検索について知らなければならない。検索に先立つ，研究者へのインタビューと討議による認識の共有も不可欠となる。その一方で，その時々の条件や目的に合わせて，さまざまな配慮や例外的対応を必要とする場合もある。その限りで，検索の過程は研究者と共同で創造的に進める研究の一過程でもある。

このような中で，こうした活動を支える書誌データベースと検索システムが信頼に足るものであるかも問われるが，現状ではまだ課題が多いと言わざるを得ない。

なお今回は検索相談・研究相談や毎年数件のシステマティック・レビュー研究，臨床ガイドラインプロジェクトへの参加・協力など自身の経験に基づいてお話しする。この中で件数的にウェイトが大きい検索相談（1998 年以降累計 6000 件余）の多くは看護学であり，医学・歯学その他の分野も何百件かあるものの，経験的背景は看護学に偏っている。これは現在の検索要求の分布をある程度反映しているとも言えるが，ともあれ全体的にこのような偏りがある下での話題提供となることは念頭に置いてお聞きいただきたい。

講演者プロフィール

1998 ～ 2013 年大阪大学生命科学図書館，看護・医学系を中心に検索相談活動，講義，プロジェクト参加など。主著は『系統的文献検索概説』（近畿病院図書室協議会，2013）。2014 年以降もこれらの活動を継続しつつ，知識社会学・科学計量学を研究。博士（人間科学）。

連絡先：mktb@tcct.zaq.ne.jp